

第10回明治大学文学賞

阿久悠作詞賞受賞作品について（三田 完）

（全体講評）

選者が交代した今回、課題をメロディーではなくタイトルにしてみました。これは、平安の昔から詩歌の世界でおこなわれていた〈題詠〉にヒントを得たものです。タイトルで制約を受けることで、自由詞とはことなる新たなインスピレーションが湧くこともあるのではないか、という意図です。

「お茶の水ラブソディー」ではナンセンスな弾んだ詞が、「初時雨」ではしっとりとした古典的な詞が寄せられ、応募者の皆さんの題詠に対する的確な姿勢を感じました。

とはいえ、相変わらず応募作の大多数は〈喪失感〉をテーマにしたものでした。それはそれでいいのですが、言葉に個性を感じる作品は少ない。抽象的で、月並みな〈喪失〉が多かったのが残念です。

もっと具体的な風景を。

もっと斬新なフレーズを。

たぶん、これが阿久悠作詞賞がつづくかぎり、応募者に求められる課題だと思います。来年以降も、若さゆえの暴走に期待します。